

Title	ジュニャーナガルヴァの『二諦分別論』(Abstract_要旨)
Author(s)	赤羽, 律
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	2003-03-24
URL	http://hdl.handle.net/2433/148621
Right	
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	none

氏名	あか はね りつ 赤 羽 律
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博第242号
学位授与の日付	平成15年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	文学研究科文献文化学専攻
学位論文題目	ジュニャーナガルヴァの『二諦分別論』

論文調査委員 (主査) 教授 御牧克己 教授 徳永宗雄 教授 赤松明彦

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は800年ごろインドで活躍した Jñānagarbha (JG) によって著作された『二諦分別論』(Satyadvayavibhaṅgavṛtti: SDVV) に示された二諦説を明らかにすることを主眼とするものである。SDVV には既に三編の現代語訳が存在し、チベット語訳の校訂テキストも発表されているが、何れも不十分な感を否めない。今回、これまで現代の研究者が未見であるチベット人 Dar ma bkra shis による SDVV の注釈書の写本 (bDen gnyis rnam par 'byed kyi bshad pa: SDVL) を参照する機会に恵まれた。その注釈書を活用することで、SDVV に関してこれまで不明とされてきた諸々の点を明らかにした。

まず Chapter 2 では、SDVV に関する研究史を主な先行研究を中心にして纏め、JG に先行する中観派の二人の論師、Bhāviveka, Candrakīrti の二諦説を簡単に纏めた。

Chapter 3 では、まず SDVV の著者、翻訳官、密教論者という三人の JG と呼ばれる人物の存在を確認し、SDVV の著者 JG の著書を確定することを試みた。JG 作と伝えられている Anantamukhanirhāradhāraṇīvyākhyānakārikā (ANDh) に SDVV と同じ三つの偈が用いられ、その自注 Anantamukhanirhāradhāraṇīṭikā (ANDhT) の幾つかの章(特に9章と10章)に SDVV との多くの類似点が存在することを指摘し、ANDh と ANDhT が SDVV の著者による論書であることを明らかにした。また、ANDhT に引用された偈と SDVV の中間偈の類似性に基づき、ANDh と ANDhT が SDVV に先行する論書であることを示した。次に、JG と二人のインド仏教中観論者 (Avalokitavrata, Śrīgupta) との関係を『Tāranātha』と『Bu ston 仏教史』という二つの歴史書と、年代確定の資料として用いられる「考察されないなら喜ばしい」「離一多性を証因とする無自性論証」という二つの表現の有無によって吟味し、これらの論師が極めて近い時代に活躍していた可能性を指摘した。特に「考察されなければ喜ばしい」という表現については、Avalokitavrata によって仏教論書中に初めて用いられ、SDVV の細疏 (Satyadvayavibhaṅgapañjikā: SDVP) の著者 Śāntarakṣita がその表現を世俗の定義として確立した点を明らかにした。

Chapter 4 では、SDVV の成立過程とタイトルの問題を考察した。チベット大蔵経中の46偈からなる SDK がチベット語訳された SDVV より引き抜かれたものであり、その引き抜きには手違いがあったことを明らかにした。SDK と SDVV がチベット語に翻訳された当時の目録『lHan dkar ma 目録』には、SDK の偈数は37偈とされており、現存する SDK の46偈より9偈も少なく、さらにチベット大蔵経目録の元となった『Bu ston 仏教史』の目録には、さらに少ない27偈という偈数が挙げられている。つまり、現存する SDK46偈中には元々 SDVV にしかなかった偈が誤って引き抜かれ混入している可能性がある。この論文では誤って引き抜かれた全ての偈を確認することは出来なかったが、少なくとも SDVV の最後の5偈が SDK には存在しなかったものであることを確認した。さらに『Bu ston 仏教史』の27偈という偈数については、lHan dkar ma 目録の37偈を誤記した可能性が高いことを示した。また、この目録の調査を通じて、SDVV がチベット大蔵経テンギュール目録において別のタイトル (Satyadvayaviniścaya) として挙げられている点を指摘した。この点は先行研究において指摘されているが、このタイトルが SDVV のコロフォンに基づく誤解であることを示した。さらに、このタイトル

の問題はチベット大蔵経テンギュール目録の成立に関して重要な問題を提起している。即ち、大蔵経五版全ての目録とその元となった Bu ston の二編の目録において SDVV が上述した別タイトル (Satyadvayaviniścaya) として記載されていること、さらには、SDK と SDVV が含まれていない大蔵経三版 (Peking 版, sNar thang 版, dGa' ldan 版) に関しても目録にはそのタイトルが含まれていること。この二つの事実から、大蔵経の目録がその内容に応じて作られたものではなく、Bu ston の目録から機械的に転写された可能性が高いことを明らかにした。

Chapter 5 では、SDVP の著者の問題を扱った。一般的に SDVP の著者 Śāntarakṣita は Madhyamakālamkāra (MAV) の著者と同一人物であると考えられているが、チベット仏教史上最も有名な学僧 Tsong kha pa は MAV と SDVP の著者とが別人であると主張する。この Tsong kha pa 説の妥当性を先行研究における主張をまとめつつ確認した。その結果、Tsong kha pa 説が従来の研究成果の通り不適切であることを明らかにした。

Chapter 6 では、SDVL に関する考察を行なった。Dar ma bkra shis と呼ばれる人物は、チベット歴史書 (Deb ther sngon po と dPag bsam ljon bzang) に見出される11-12世紀において活躍し、sPyan g-yas 寺三代目座主とされる人物と、[Bu ston 聴聞録] に見出される人物である可能性が高いことを明らかにした。さらに、SDVL で用いられる二つの表現を取り上げ、それらの表現が上記の人物の可能性を補完するものであることを指摘した。

Chapter 7 では、SDVV で用いられる幾つかの表現を取り上げた。まず、二諦説の中心をなし、先行研究で同じ価値を持つとされてきた真実 (yang dag pa, tattva) と勝義 (don dam pa, paramārtha) という二つの表現が、対論者である唯識論者と JG 自身との思想的立場の違いを明示する役割を担っていた点を明らかにした。この他これまで意味がはっきりしなかった yug pa rkyang, kha na las pa, khong nas dbyung という SDVV に見られる表現のサンスクリット原語を確定し、意味を明らかにした。

Chapter 8 では、SDVV に説かれている二諦説と JG の思想的立場について考察した。勝義には「言語表現を離れた無戲論の勝義」と「無戲論の勝義に相応し言語表現される勝義＝論理」の二種類が存在する。一方で世俗は「考察されないなら顕現するがままのもの」と定義され、その上で「効果的作用があり、構想されたものを欠いた顕現するがままの実世俗」と「構想されたものである有分別の邪世俗」と「顕現するがままであるが効果的作用を有さない無分別の邪世俗」の三つが存在する。特に世俗とも勝義とも理解される「論理」については、それが世俗と見なされる場合でも、世俗の定義「考察されないなら顕現するがままのもの」から逸脱する「考察によって決定されたもの」であることを指摘し、厳密には実世俗には属さない、それよりも一段上位の立場の世俗であることを明らかにした。

この二諦の区別を踏まえ、チベットで様々な学派に分類される JG の思想的立場を考察した。特に彼を「瑜伽行中観派」と見なす説と、「世間行中観派」と見なす説、それぞれを主張する現代の学者による論争を纏め、SDVL の注釈を根拠として「JG はどちらの学派とも見なされる表現を SDVV で用いているが、それは対論者に応じて使い分けられたものである」という筆者の見解を提示した。即ち、JG は論書の著者を相手にする場合には「自己認識」という用語を用いて「瑜伽行中観派」と見なされる主張を行う。一方で、一般の人を相手にする場合には「自己認識」という特殊な用語は用いず「世間行中観派」と見なされる主張を行っているのである。それ故に、JG を何れの学派に分類することも妥当ではないと考える。しかし、強いて分類を行うならば、「考察されないなら顕現するがままのもの」という世俗の定義に基づき「世間行中観派」の人物として分類するほうが妥当である。さらに、Bhāviveka と Candrakīrti の二諦説との比較を行い、JG の二諦説が Bhāviveka のものより Candrakīrti のものに近いことを指摘した。

最後に、上述の考察に際し行った SDVV, SDVP, SDVL の校訂テキストと、SDVV と SDVL の和訳、さらには SDVL に関してはそのシノプシスと要約を付した。全訳を挙げなかった SDVP に関してはできる限り SDVV の訳中に例示した。

論文審査の結果の要旨

本論は、インド仏教史に於て七世紀末から八世紀始めにかけて活躍したジュニャーナガルヴァによって著作された『二諦分別論』を中心に彼の二諦説を明らかにし、従来未解決であった彼の思想的立場をめぐる様々な問題に取り組んだ、全体で A4 版ワープロ原稿691頁にも及ぶ優れた大論文である。

二諦とは、言葉によって表すことの出来ない最高の真理（勝義諦）と言葉に依存した普通の世界の真理（世俗諦）一実は

この両者は同一のものの両側面なのであるが—という二つの真理の意味であり、般若経の空の思想を哲学化したナーガールジュナを始祖とする中観学派の中心的教義であり、この学派の諸論師によって、種々の異なった立場から、常に論じられてきた主題である。ジュニャーナガルヴァの『二諦分別論』（偈頌並びに自注）は、サンスクリットでは伝わらず、漢訳もなく、チベット語訳においてのみ伝存されている。論者は、『二諦分別論』（偈頌並びに自注）の批判的校訂本、並びに和訳、シャーンタラクシタ（725—788年頃）による『二諦分別論復注』の批判的校訂本、チベット人タルマタシ（12世紀）による『二諦分別論注』の批判的校訂本、和訳、シノプシス、内容要約を提出した上で、さらにその他の中観学派の論師の諸論書を渉猟し、文献学的に現在可能なあらゆる手段を用いてジュニャーナガルヴァの二諦説の構造を明らかにすることに成功している。『二諦分別論』には従来二種類の和訳と一種類の英訳が存在し、また、英訳に付された校訂本が存在するのではあるが、いづれも極めて不十分な部分が多いため、本論によって信頼に値するテキストと訳が完成されたことは研究史に於ける大きな貢献ということが出来る。

本論には多くの功績があるが、特に重要なものに限って列挙すれば次の六点にまとめることが出来る。

(1)本論の最大のメリットは、とりわけ、『二諦分別論』に対する12世紀のチベット人タルマタシの注釈を初めて世に明らかにした点にある。本注釈の存在を知る研究者は世界でもまだ数人しかいないが、その発見、入手については2000年4月より4ヶ月間本学に客員教授としてお招きしたハーバード大学の Leonard van der Kuijp 教授に負っており、教授より託されたものである。同注釈は判読しにくい草書体で書かれた写本であるが、論者は丹念に解説し、テキストを確立し試訳を提出した。同注釈は仏教後期伝播期の最初の頃にチベット人達が交したと思われる非常に難解で複雑な議論を含んでおり、完全には読解できない部分があり、今後に課題を残す部分もあるが、同注釈のお陰で従来未解決であった『二諦分別論』をめぐる問題点のいくつかが解決できたことは高く評価できる。

(2)チベット宗義書の諸論師によって種々の立場に分類されてきたジュニャーナガルヴァの思想的立場を明確化し、何故そのような見解の相違が生じたのかを明らかにした点も本論の大きな功績である。ジュニャーナガルヴァは例えばゲルク派系の諸論師から経量中観派に分類され、サキヤ派系の論師達からは瑜伽行中観派に分類され、カダム派系の諸論師からは世間行中観派と呼ばれている。論者は、この三つの立場のうち、近年研究者の議論が集中している後の二つの立場について、『二諦分別論』第8偈に於いて教義論者を相手に自己認識に関する議論を展開することから瑜伽行中観派と解され、一方、『二諦分別論』第12偈に於ては教義論者ではなく一般の人を念頭に於いて世俗の立場を「顕現するがままのもの」と規定する点から世間行中観派と呼ばれているという点を明らかにした。ジュニャーナガルヴァの思想的立場をめぐる従来の解釈の不明瞭な点が、論者の説得力のある説明により決着をつけることが出来た点は高く評価できる。ただ、論者は、ジュニャーナガルヴァが何故ゲルク派系の人達からは経量中観派に分類されるかという点については立ち入った分析を行ってはいないが、この点は論者の今後の研究に期待したい。

(3)論者は、『二諦分別論』の作者、翻訳官、密教論者というジュニャーナガルヴァという同じ名前をもつ三人の人物を特定し、彼の名前で伝わる諸著作を夫々の著者に担当している。中でも、陀羅尼をそのタイトルに含むことから従来密教のジュニャーナガルヴァの著作であると考えられてきた『無辺門成就陀羅尼注』が実はそうではなく『二諦分別論』と密接な関係を持ち、しかも『二諦分別論』と同じ著者によって『二諦分別論』に先立って著作された事実を論証したのは大きな功績である。ただ、『正理一滴論注』中に関説されるジュニャーナガルヴァに関する考証は論者の今後の研究に期待したい。

(4)「考察されない限り喜ばしい」という世俗の定義、並びに「離一他性を証因とする無自性論証」の取り扱い方法を根拠に、当時の複雑なクロノジーを明解に解明し、ジュニャーナガルヴァ→アヴァローキタヴラタ→シュリーグプタ→シャーンタラクシタという思想家の順序を確立したことも本論の大きな功績である。

(5)本論にとっては補足的な産物であるが、不明な部分が多いチベット大蔵経の成立史に新たな光を投げることになった点が注目される。『二諦分別論』はチベット大蔵経のうちチョネ版とデルゲ版にのみ保持されており、その他の北京版、ナルタン版、ガンデン金写本には含まれていない。しかし、不思議なことに、例えば、北京版に付置されているカタログには、名前が挙げられている。これはカタログ自体が実際の内容をチェックしつつ作成されたのではなく、以前に存在したカタログを機械的にコピーしている可能性を示している。論者の考証によれば基になったカタログはプトンの『テンギユル目録』である。

(6)従来意味が明確ではなかったいくつかのチベット語の用語の意味内容を明確にすることに成功している。例えば, yug pa rkyang (足が宙に浮いて地に着かない, つまり確固としていない), kha na las pa (依存する), khong nas dbyung (補われるべき)等の用語の意味を, 諸文献の文脈の吟味, サンスクリットの対応語の同定等によって, 確定した。

このように, 本論にはジュニャーナガルヴァの二諦論の内容ばかりではなくインド仏教やチベット仏教の多くの興味深い問題が取り扱われて解決されており, 研究史の発展に重要な貢献であるということが出来る。しかし本論にも問題点や不備な点がない訳ではない。名称は同じとはいえ実在論者が論じる際の二諦の問題と, 中観学派の二諦の問題を同列に扱うのは適当ではない。今後に残されたいいくつかの課題は上記の各項目中に略述した。さらに, 本論には随所にプレゼンテーションの不備が見られるのは惜しまれる。また, 引用文献の誤訳, 誤記, 誤植の類も少なくなく, せっかくの好論の汚点となっている。しかしながら, これらの諸点は, 少し努力すれば容易に改善出来る性質のものであり, 高いパイオニア性を有し, 多くの新たな知見を示した本論文の価値を大きく損なうものではない。

以上審査したところにより, 本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。2003年2月20日, 調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果, 合格と認めた。